

金属器研究の最新動向と 弥生時代から古墳時代への社会変化

「真正弥生時代」からの脱却を示す
近畿「後・終末期」相と相互研究の整合性

Trends in the Latest Research on Metalware and Social Changes from the Yayoi Period to the Kofun Period: Consistency with Research on “The Late to End Stages of the Yayoi Period,” which Deviated from the “True Yayoi Period” in Kinki

森岡秀人

MORIOKA Hideto

はしがきにかえて

- ① 青銅器生産における近畿の社会変化と製作技法復元像の諸問題
- ② 弥生後期における近畿の鉄器製作技術の評価に関する諸問題
- ③ 金属器と後半期弥生社会の変化，古墳出現期への道程をめぐって

【論文要旨】

日本列島で展開した弥生時代は，朝鮮半島から伝わった水田稲作を中心とする初期農耕社会が時間をかけてゆっくり広まったが，青銅器・鉄器などの金属製品を同時に伴っていたわけではなかった。

近畿地方では，その中期初頭に青銅器・鉄器が導入されたが，既に農耕生活において大陸系譜の磨製石器や縄文伝統の打製石器が活躍しており，青銅器は銅鐸・銅剣・銅戈などの大形祭器と化し，鉄器は実用の木工具から浸透し始めたが，その実数は限られたものであった。土器の無文化が急速に起こった後期は，熟成した弥生文化，もっと言えば，近畿の「真正弥生時代」の終焉以降となる。

社会が激変した後期以降，青銅器の生産体制や鉄器の製作技術はどのように変化するのか。それを追跡する形で生産体制の変革の差違が大きく認められるので，近年弥生時代全体を通してモデルを提示し，推移の意義づけを行ったが，新しい視座に基づく金属器研究に共同参画し，その信憑性についての所見や議論を通じ，現時点での見直しも一定進んだ。それらを踏まえつつ，この研究成果の総覧を基礎として二，三の総括を行い，併せ私見を述べた。

【キーワード】 真正弥生時代，青銅器生産体制，鉄器製作技術，近畿地域，弥生後期社会，金属原料問題